昔

▲昭和40年頃の長尾駅。駅前広場は手前の田んぼに向かって下り坂になっていました。

▲一日の乗降者数は約２万6000人（平成22年現在）。奥に工事が進む新駅舎が見えます。

▲平成元年に長尾－木津間が電化されるまで走っていたディーゼルカー。

駅前広場で映画や盆踊りも楽しめた

長尾駅

ＪＲ長尾駅は明治31年、大阪と奈良を結ぶ鉄道の駅として誕生しました。開通式には花火が打ち上げられ、汽車の姿を一目見ようと多くの人がお弁当持参で駆け付けるなど、鉄道の誘致運動を進めていた菅原村の住民が総出でお祝いしました。

昭和25年には四条畷－長尾間が電化され、電車が走るようになりました。長尾駅のすぐ近くに住む長尾区長の笹田庄次さん（67歳）は「客車を引っ張る最後の蒸気機関車に向かって日の丸の小旗を一生懸命振りました」と当時5歳の思い出を語ります。その頃電車の本数は1時間に1本程度。駅の利用者も知り合いばかりで、駅員さんが「○○さん着きましたで！」と車両の中で寝てしまったお客さんの名前を呼んで起こすこともありました。

また、駅前広場は、中央に柳の木があり、夏は盆踊りでにぎわうなど、地域住民が集う場所でした。駅前周辺は田んぼが広がり、車の通行もほとんどなかったことから、道路を隔てた田んぼの手前にスクリーンを立て、チャンバラ映画などの上映会が開かれたことも。笹田さんは「晩ごはんを食べるとすぐ、座布団片手に広場へ走りました」と懐かしそうに振り返ります。

長尾駅沿線は昭和40年代以降、宅地開発が進み利用者数は大きく増加。平成9年には学研都市線が東西線とつながり、神戸方面へのアクセスも便利に。現在はラッシュ時の混雑緩和や歩行者の安全確保に向け、新駅舎や駅前広場などの整備を進めています。

（平成24年7月号）